

2019年度 大谷大学文藝コンテスト総評

今回はエッセイ部門に494篇、小説部門に124篇の応募があった。傑作揃いで感激した、などとリップサービスに勤しむつもりはない。事実、語彙の乏しさと語法の不正確さが思想の浅さや感覚の鈍さに直結してしまった生硬な作品や、自分を楽しませるためだけに書いている自己満足の作品も目についた。ここから抜け出すには、いま目安にも手本にもなっている（であろう）ライトノベルや漫画やアニメーションなどを相対的に捉える視線――それは自分自身を客観的に捉える視線でもあるのだが――を別の知識や体験を通して意識的に身につけていくしかないのだろうな、と口惜しくももどかしくも感じるのが幾度もあった。だがその一方、両部門で多くの興味深い作品に出会えた。応募作品に目を通す時間は、審査する私たちにとっても紛れもなく有意義な時間であった。何より心躍る時間だった。だから応募してくれた生徒諸君にはまず、厚く御礼申し上げる次第である。

その上で、今回もやはり指摘しておきたいことがいくつかある。問題点の指摘ばかりではない。自分の長所や個性を作品に効果的に投影するにはどうすればいいのか。いいかえると、鋭利な洞察や新鮮な発想を作品内に組み入れるにはどうすればいいのか。表現行為を志向する者すべてにとって大切なこの課題についても、今回は少々考えてみようと思う。受賞作は内容・表現とも多くの審査員の好評を勝ち得たから受賞作となったわけだし、短文ながら個別の評も与えられるので、ここでは惜しくも受賞に至らなかった作品にスポットライトを当てて考えたい。まず、エッセイの方から見ていこう。

たとえば、小学生の頃のだんごむし飼育体験を綴ったユニークな回想がある。小学二年生から小学五年生までのだんごむし飼育の変遷が、手際よい情景描写と整然とした構成と洗練された文体によってまとめられている。文章表現力はなかなかのものだ。しかし残念ながら、このエッセイは受賞に至らなかった。なぜか。それは語り手＝書き手である〈私〉のだんごむしへの愛着に、深い裏付けが認められなかったからである。いくらだんごむしが好きだからといって、それを学校で飼えば周囲の人々が甚大な迷惑を被ることぐらい誰でもわかる。それでもなお、あえて飼いつづけるからには、そこによほどの必然性（内的にも物理的にも）がなければならない。そういう切迫した動機が文中には十分に表現されていなかった、と私たちは判断したわけである。これではだんごむしへの執着という、ちょっと倒錯的な題材の物珍しさに頼り切っているだけではないか、という声もあった。結末近くに「床の下は天国のようなところかもよ」というクラスメイトの言葉や、「だんごむ

しはいつも、私から逃げていく。しかしそんなときはいつでも、私を気遣う人がいた。」という語り手の認識が記されている。私見では、この作品の独創性や可能性はこうした部分に胚胎している。つまり、この作品を成功に導くためには、学校でのだんごむし騒動はあくまで前提の位置にとどめ、「床下の天国」について想像力を思い切り働かせればいい。あるいは、恋愛原理の象徴とも読める〈私〉の認識を、〈私〉の内面探究に接続して思索を推進すればいい。だんごむしの愛玩をアピールすれば人目を引くにちがいない……。もしそこに書き手の意図があったのなら、安直といわざるをえないだろう。

草食系男子がもてはやされる現代日本の風潮を軽やかに揶揄・批判する文章も楽しかった。男らしい男の復権・復活の主張がアナクロニズムであることを十分承知した上で、映画や漫画や歌詞などからの的確に具体例を取り込み、読者を飽きさせずに結末まで引っ張っていく。「けしからん」といった仰々しい言葉遣いや、「モテるのび太君など存在すべきでないのだ。」という機知的な結論も決まっている。ではなぜ、このエッセイが受賞に届かなかったのか。「今や、世間は一周まわって女尊男卑というステージに突入して」いる、という現状認識がサブカルチャー隆盛時代のマスコミの受け売りに近いこともよろしくないが、それ以上に問題視されたのは構成の緩さである。「冗談はさておき、」や「つまり、何が言いたいかというと、」といった言い回しが端的に示すように、このエッセイは緊密に組み立てられた展開が読者を説得するような文章ではない。もしかしたら書き手は周到な計画に基づいて具体例を文中に配置したのかもしれない。行き当たりばったりのように見える具体例や主張も、書き手の綿密な操作の結果なのかもしれない。だがいかんせん、その飄然たる味わいがコンテストという場では望ましい文学的価値とは認められず、マイナスに作用してしまった。

もう1篇、構成の問題が災いして受賞を逸した佳品がある。何匹もの猫が親から子へと代替わりしていく現象を、猫をかわいがる伯父、病気で入退院を繰り返している母親、そして猫アレルギーにもかかわらず野良猫にも懐かれる〈私〉、これら3人の人間たちの運命と重ね合わせ、日本伝統の無常観のようなものを自分自身のたしかな手応えとして描きとめている文章だ。現代の若者が、ポーズや知識としてではなく固有の実感として無常観を抱懐するのは稀有なことではないか。そう思って私は推したが、文中のあちこちに出没する猫たちが作品世界を無秩序に見せ、その無秩序を招来したのが未整理な文章であるかのようにも見えてしまうため、高い評価は得られなかった。「命あるものはいつか死ぬのは当たり前。家族も友達も自分だってそうだ。」のような突っ慳貪な語り口も、丁寧かつ慎重に

語られる作品を隣に置くとやや粗さが目立ったから、やむをえないといえはいる。もつとも、いま見たような愛想のない語り口こそ、何者・何事にも執着しない点で無常観を表現するにふさわしい、と考えることもできる。

本コンテストのエッセイ部門で募集している文章は、論文ではない。だが構成の良し悪しも審査の対象であることはいままでもない。用語も構成も息詰まるほどの緊密さや正確さが求められているわけではない。ただ、総体的に姿勢のいい文章が審査員の支持を集めやすいことはたしかだ。天下国家を大真面目に論じようと、一般人の良識から隔絶した考えを繰り広げようと、それ自体は何ら問題ではない。が、どんな主題を扱うときもどんな主張を展開する場合も、それらは表現と代替不能なくらいしっかりと結びついていなければならない。私たちが期待する魅力も説得力もある文章とはそういうものなのだ。

次に小説部門。与えられたスペースの残量が僅かなので、簡略になることを御容赦いただきたい。SFないしファンタジー系のディストピア物やパラレルワールド物が比較的多く、それらが一定以上の水準を獲得していたのは例年通りである。そういう作品は、いつものように私たちを楽しませてくれた。とはいえ発想・設定・展開など特に物語形成の点で親近性の高い作品が多いのは必ずしも喜ばしいことではない。それは審査員をうならせるような斬新な作品が少ないことを意味するからだ。やはりよほど工夫を凝らさなくては一頭地を抜く物語作りは難しいだろう。忘れないでほしいのは、小説では物語とともに視点や文体も非常に重要だということ。視点や文体の成否が物語のそれ以上に作品の成否に関わることも多いのである。これで行こうとおおよその方針を定めたら、さらにもう1つか2つ、そこに工夫や捻りを加えることを心がけてほしい。

主題の面で印象に残ったのは、同性愛をはじめとするLGBTと、いじめである。いじめの被害者が加害者に復讐をする物語がある。といっても単純な因果応報譚ではなく、いじめを受けた側も恨みを晴らそうとすると嫌な人間になってしまう。書き手の鋭い人間洞察力が発揮された展開だと思う。同性愛を取り上げた小説は、日常的な明朗さや平穏さの裏に潜む痛みをそっと掬い上げたような優しさと切実さがあり、読後の感触は柔らかいが脳裏に刻まれた陰翳は深い。どちらの主題も複数の作品で扱われており、いずれも読み応えがあった。書き手がもう一步奥に踏み込む勇気をもったならば、いじめもLGBTも傑作成立の原動力となるかもしれない。